

催吐処置により一時的に重度の視覚障害を生じた猫の一例

○川瀬 広大、村野夏穂、弘川 拓、安部貴之、亀山健吾

札幌夜間動物病院

はじめに

猫の催吐処置法は、メドミジン(Thawley VJら, 2015)やトラネキサム酸投与が知られており、当院の調査(岩戸ら 2019.)では、56.6%の猫で催吐処置に成功していた。同調査における有害事象は、流涎や頻回嘔吐など軽度なものであり、犬と同様に安全性は高いと考えられていた。今回、催吐処置にトラネキサム酸とメドミジンを投与したところ、一時的な視覚障害を生じた猫に遭遇したので、その概要を報告する。

症例

5歳、スコティッシュフォールド、去勢済み雄、体重5.3kg、針金を飲み込んだという主訴で来院した。既往歴はなく、一般状態も良好であった。飼い主の稟告から誤食は確実と判断し、トラネキサム酸50mg/kg急速静脈内投与による催吐処置を行った。繰り返し3回投与(合計150mg/kg)後も嘔吐しなかったため、メドミジン10 μ g/kg筋肉内投与したが嘔吐しなかったが、投与後に開口呼吸や軽度の涎症状は認められた。その後、アチパメゾール10 μ g/kg筋肉内投与し処置を終了とした。催吐処置から約8時間後、飼い主より目が見えていないという連絡があり、翌朝主治医を受診した。主治医においても視覚異常が診断され、同日動物眼科専門医を紹介受診した。両眼の威嚇瞬目反応は陰性で重度な視覚障害が生じており、比色対光反射の反応から両眼ともに網膜機能の低下が疑われた。網膜血流改善を目的にアムロジピン0.625 mg/head、SID、また網膜機能改善のためのビタミンEを含むサプリメントの服用を開始した。1週間後の再診では、両眼の威嚇瞬目反応、綿球落下試験ともに陽性で回復していた。さらに1ヶ月後、さらに精査を実施したところ、両眼の脈絡膜萎縮による網膜変性と診断した。

考察

トラネキサム酸による視覚障害に関する報告は、猫(林ら, 2017)やヒト(Kitamuraら 2003)で報告されている。本症例では、両眼の脈絡膜萎縮が認められていたことから、トラネキサム酸が原因で眼底への血流障害が生じ、網膜変性が引き起こされたことが強く疑われた。高用量トラネキサム酸により視覚障害が発現する可能性があること、またその頻度や中毒量、重症度が不明であることから、今後トラネキサム酸以外の催吐方法を選択するべきであると考えられた。